

アメリカの外国人

教育学部 樋口 聡

「ユングのこと、どう思う？」と聞かれて、「あまりよく知らないけれど、スポーツ選手の深層心理やスポーツの運動中の実践者の無意識の問題などで、関心を持っている人も何人かいるみたい」などと答えたら、どうも話が合わない。デイヴィッドもそれを察したらしく、「いやいやあのユングではなくて……」と言う。ヴァージニア州のオールド・ドミニオン大学の哲学科で応用倫理学を教えているデイヴィッド・ジェームズ先生の家泊まった時の会話である。日米の哲学界で今どんなテーマが人気があるか、自分はどんな問題に関心があるか、などといったことを話していたことだったので、ユングと言われて精神分析のあのユングのことを思ってしまったのだ。デイヴィッドはもう一人の Yung のことを私に聞いていたのだった。

正しくはどういう名前なのか知らない。おそらくユンさんと言うべきなのだろう。アメリカはヴァージニア州のノーフォークにあるオールド・ドミニオン大学で、私はこのユンという韓国人に出会った。いや、韓国人と言うのは正しくないかもしれない。生まれたのが戦前で、今の北朝鮮から追われるようにして国を出たというのだから。今はこの大学の哲学科の教授である。専門は、これも定かでないが、どうやら数学らしい。だから、数理哲学か論理学あたりの先生なのだろう。その分野の国際雑誌を編集していると言っていた。広大な図書館の雑誌リストで確認しようとしたが、それらしいものは見つからなかった。

テネシー大学に滞在していた私は、デイヴィッドに誘われて彼の大学を訪ね、そこで「美学とスポーツ」というテーマで話をする

機会を得た。その会場の最前列でユンさんは私の話を聞いていた。ディスカッションの時間に最初に質問をしたのが彼だった。「美学とスポーツを結びつける試みは斬新だが、それが伝統的な美学の概念と整合性を持つかどうか。日本には独特の美学があるでしょう」などといった内容の質問だった。それに対して、「私が言う美学とは、美をめぐる哲学的な知の集積体、学問としての美学なのであって、日本人に独特な世界観とか人間観とかいった事柄とは差し当たってかわりがない」と私は答えたように覚えている。

議論がはずみ、予定の時間が過ぎてしまったので、場所を変えて希望者だけででも少し話をしようということになった。教官用のこぢんまりとしたサロンのような部屋に移動した時、ユンさんは突然日本語を話し始めた。流暢な日本語である。これまでどういった人生を送ってきたか、今どんな生活をしているかといった身の上話が主だった。日本語は戦時中に強制的に習わされたそうだ。しかし、日本語は好きで、日本語で論文を書いて日本の新聞に投稿したりしているという。「日本語は私の言葉のふるさどです」というユンさんのつぶやきに、何かしら感慨を覚えずにはいられない。

ユンさんの話は延々と続いた。場所を彼の研究室に移して、どれほどの時間が経ただろう。10階ほどにある彼の研究室からは遠く工事用のクレーンが見えた。そのクレーンの動きも止まって、街全体が静かに夕暮れの曇り空の中に沈んでいく、そんな時刻にいつの間にかなっていた。「はい、そうですね」「ああ、そうですか」「たいへんでしたね」「なるほど」「ええ」、私が発した言葉はこれくらいだったように思う。

4, 5時間の面談の中で。私はアメリカに数か月住み、アメリカ人の対話のスタイルに慣れてきたが、この時ばかりは、目上の方のお話を拝聴するという日本的な対人関係の状況へ自然に入っていたのだった。

改めてユンさんのことどう思うというデイヴィッドの質問に、「変わった人だね」と私は答えた。そう答えるしかなかっただろう。この地に10年以上も住んでいて、友人は一人もいないのだそうだ。家族は？奥さんと子供がドイツにいるという。夕方6時過ぎには床につく。夜中に起きて朝まで本を読んだりものを書いたりする。週に2回だけ大学に出てくる。そういった生活を何十年も続けているという。彼は学者としては優秀らしい。若いころすでにかんりのポストを獲得したそうだが、それがちょっとしたことで元の木阿彌へと帰してしまうのがアメリカ社会の苛酷なところだとこぼした。一度すべてを失って、ゼロからやり直すという辛酸を嘗め尽くしている。それが結局は今の自分のためになっているなどとしんみりと話す。

我々は、翌日ノーフォークの郊外をドライブして昼食をともにする約束をした。言葉のふるさとからの来客に、彼はよほど気をよくしたらしい。異例の行動スケジュールを立て、普段はかたくなに閉じている殻を私に向けて開こうとしているのだ。しかし、彼のもくろみは観測史上まれにみる大雪で碎かれてしまった。昨日のどんよりとした曇り空が、海辺の街ノーフォークを一夜にして雪国に変えてしまったのだ。外出不可能。ユンさんは、私が泊まったデイヴィッドの家にその朝電話をかけてきた。ここでもまたまた彼の一方的な長話である。私と日本語で話ができてうれしかったということ、おそらく彼の御機嫌はそれに尽きるだろう。今日は私の話を聞くつもりだったと言う。一方的に彼が話していたことには彼自身気づいていたのか。意外だった。私の方も、久しぶりで日本語でいろいろと文化や哲学のお話を伺えて楽しかったことを伝えて、受話器を置いた。彼の闇に向かっ

ての絶叫とも呻吟ともつかぬ戦慄が、私の胸に残った。彼には、帰る国がないのだ。

アメリカ滞在中、私は何人かの「外国人」に出会った。ドイツ人、フランス人、中国人、そして日本人。彼らは、何らかの理由があってこの国にやって来て、留まっている。私を知っている人々は、みんな祖国があってそこに家族が住んでいる。クリスマスから正月にかけて里帰りする人もいる。ユンさんのような境遇の人などいない。がしかし、本当に彼らには「帰る国」があるのだろうか。アメリカでユンさんに出会って、私は自分の国、日本を思ったことは確かである。私には帰る場所がある。故郷には父母や兄弟が健在で、私を待っている。そこは確かに私の帰るべきところである。そう思うと同時に、私はそこが本当に私の帰るべきところなのだろうかと疑問に思ったことも事実である。

ユンさんは社会的、政治的な事情で祖国を失った。しかし、もし彼が不幸であるとすれば、そのことよりもむしろ、彼が今生きる場所で、どんなに努力奮闘してみても本当に「帰るところ」を見出せないでいることではないのか。そうだとすれば、それは私自身の問題でもある。いや、私たち自身の問題だと言えるだろう。考えてみれば、本来的に全員が互いに外国人みたいな国アメリカでは、人々は常に、自分の帰る国を発見する努力を強いられているのかもしれない。

アメリカで私が出会った「外国人」はみんな頑張っていた。彼らは多かれ少なかれ、早かれ遅かれ、この祖国探しの問題にぶつかるだろう。モデルができるほどの美貌を持ち合わせアメリカでドイツ哲学を学ぶというドイツ美人のカリン、ファッションの拠点パリからアメリカの田舎テネシーにやって来てインテリア・デザインをやりたいたいというパリジャン、クリステレ——そう言えば彼女はスキーがうまかった。彼女の滑りは60年代のフランススキーそのものだった。ファッションナブルというほかない——、そんな彼女らにも私はすごいエネルギーを感じ、悲痛の叫び声を聞かないわけにはいかなかった。